

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-5

父娘は喫茶店を出ると老舗書店の『金港堂本店』まで歩いて行った。

父はカウンターで調べてもらおうと、新潮文庫本コーナーから龍口直太朗訳の『ティファニーで朝食を』を見つけ出して会計時に書店オリジナルのブックカバーを頼んでくれた。

「280円の誕生日プレゼントだよ」と父は周りを気にしながら小さく笑って、娘に本を手渡した。

「ありがとう」と娘は間を置かずに言った。

アメリカの中編小説『ティファニーで朝食を』は、10歳の少女に荷が勝ちすぎた。

ましてや、映画と原作の違いが輪をかけて真紀の読解力を迷走させた。

小説は読み手によっては映像を頭の中で無限にイメージできるが、映画は完成された映像に支配されやすい。さらに映画は時間的制約があるのに対して小説は時間の経過は読者に委ねられる。

以上のように、小説をシナリオ化した時点で無理が生じるので、たいていの映画は原作を超えることは不可能に限りなく近い。

10歳の真紀にもうひとつ厄介だったことは、35年後の2013年になるが、イギリスの雑誌『トータル・フィルム』が原作を超えた映画ベスト50本をランキングしたうちの第5位に『ティファニーで朝食を』が選ばれていることである。

例えば、ベスト20本の中には、あのアーネスト・ヘミングウェイや数多く映画化されたフランス、イギリス、ロシアなどの名立たる文豪の作品は入っていない。

つまるところ、『ティファニーで朝食を』は小説も映画も優れた作品であったことが、地頭は良いけれども、語彙力と知識力が未熟だった少女真紀の感受性をみだりに揺り動かすと同時に戸惑わせる要因となったことは違いない。

原作者のトルーマン・カポーティにしてからが、観客を感動させた映画のラストシーンには大層ご立腹だったそうだし、ホーリー役にはマリリン・モンローのキャスティングを要求していたのに、色々あって、女優としては対極に位置するオードリー・ヘップバーンが起用されたことにも不快感をあらわにしていたと言うから、映画は大ヒットしたので何が正解だったのか一概には判断できない。

いずれにせよ、父の思いつきがもたらした映画鑑賞が、その後の真紀の人生を変えてしまう端緒になった。